

◆障害学生の修学支援◆

第五回 施設・環境整備の裏側

筑波技術短期大学助教 石田久之

前号に書きました学習保障について大まかに言いますと、主として聴覚・視覚という感覚系に障害のある学生への対応ですが、施設・環境については、上肢・下肢障害や視覚障害など運動系（移動・作業）に配慮が必要な学生への対応ということになります。具体的内容については、既に五月号に書きましたので、繰り返しません。ここでは、評価ということを考えたいと思います。

健常者の思い込み

施設・設備面については、何をどのように変更しました、改修しましたという形で、学内の施設管理関連の会議で報告されているものと思います。ですから、研究としての報告はあまりありません。しかし実は大きな落とし穴があります。

施設・設備や学内環境の利用しやすさは、見た目や健常者の思い込みで考えられたものは、往々にして異なっています。例えば、視覚障害者のための点字ブロックは、白杖を使ってい

る学生だけが利用するわけではありません。弱視学生もブロックの色と周りの色との違いで進むべき道を探っていきます。ですから両者のコントラストが高くないといけません。これを凹凸があればいいということだけで、コントラストに配慮しないと弱視学生は利用できません。「美観を考えて綺麗な色のブロックを」という見た目重視ではまずいのです。

障害学生の参画

このような思い違いや思い込みは、いろいろな面で見られますので、ただ設置すれば良い、改修すれば良いというわけではありません。それらがきちんと評価されないといけないわけです、利用する障害学生にも入ってもらった上での評価体制が重要です。

キャンパス散歩

では、キャンパス内の状況を障害学生の意見を聞きながら歩いてみましょう。綺麗なキャンパスの裏側に何かあるのでしょうか。（以下の内容は、日本福祉大学大泉薄教授「障害学生問題の特質と大学としての配慮」一〜四、日本福祉大学研究紀要、一九九一〜一九九四から、多くを引用しています。）

【教室の出入り口のドア】車椅子利用者からみると、手前に引くにしても押すにしても、開けにくいものです。ドアが重い、

すべりが悪い、出入り口の幅が狭いという苦情もあります。自動ドア化が最も良いのですが、大学の玄関はともかく、教室のドアが自動ドアというのはあまり例がありません。吊り戸式の引き戸が使いやすいと言われます。よく、障害者用トイレに見られるドアです。

【教室の中】多くの大学で通路が狭く、また、机と椅子が固定されているので広くすることもできません。階段教室は、車椅子では移動が困難ですが、そうかといって、傾斜教室では、雨の場合、車椅子が滑りそうで不安を感じるという学生もいます。できれば、傾斜を緩やかにしたいのですが、わずかな経費でできるものではありません。まずは滑り止めを張ることで対応します。

また、教室内の車椅子専用スペースについても、排泄障害（頻尿）などの場合、前列中央では使いにくいとの指摘があります。ドア付近に、もう一か所必要です。

【図書館】弱視学生にとって、書架の上のほうにある分類表示や小さい背文字の本などが見えないという不便があります。車椅子の学生も高い所の本は取れません。蔵書数が少ない時は、一番上と下は使わないようにしている大学もあるようですが、増えてくると、そうもいきません。各種表示は文字を大きく、また、下から見上げて読みやすい角度をつけてください。

背文字を大きくするわけにはいきませんので、蔵書検索をし

やすいようにする必要があります。視覚障害者のための音声表示パソコン、上肢障害者のために工夫されたマウスや入力装置付きパソコンなどの設置も必要でしょう。館内アシスタントの配置も有用だと思えます。

【掲示板】車椅子の視点からは上の細かい字を読むのは首が疲れ、また、弱視の場合、夜は電気がついていても、見にくいとの苦情があります。掲示内容をテープ録音して、傍に置いて欲しいという要望も一つの解決策です。

【エレベーター】授業と授業の間の移動時は、何台あっても満員で、障害学生が使えないため、学内放送で、障害学生優先をアピールして、やっと理解してもらえようになったという大学もあるようです。

【点字ブロック】先にコントラストについて書きましたが、壁やドアなどから端部を三〇センチ以上離し、衝突の危険がないようにしなければなりません。また、多くの大学で頭を悩ませている問題は、点字ブロック上の駐輪・駐車です。せっかく、ブロックが敷いてあっても何の意味もありませんし、むしろとても危険です。

エレベーターの利用と同様に、健常学生、あるいは教職員を含め、障害学生への配慮を一人一人が理解し、協力する以外に解決の方法はありません。